

中央大学多摩キャンパスと野生動物

英文タイトル・Animals in Chuo University Tama campus.

阿部匠吾¹⁾

指導教員 シュテファン・ホーテス²⁾, 研究協力者 保延優貴³⁾

1) 中央大学 総合政策学部 政策科学科

2) 中央大学 理工学部 人間総合理工学科

3) 中央大学 文学部 哲学専攻

キーワード：緑地保全, 生態系, 中央大学多摩キャンパス

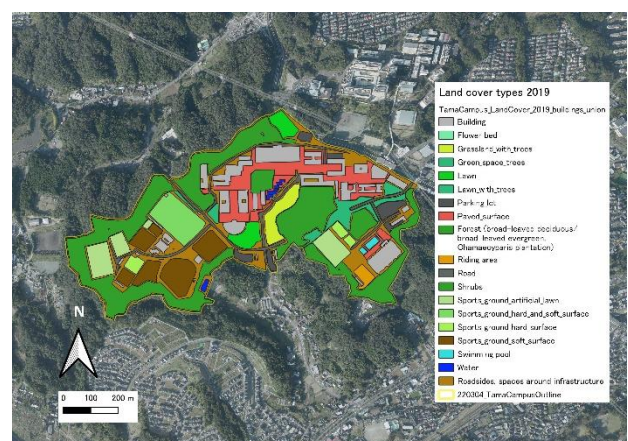
1. はじめに

私たちは中央大学多摩キャンパスで、持続可能性について定量的に学ぶことを試みる中で、中央大学多摩キャンパスの緑地が、どのような生態系を持っているのかに興味をもった。そして野生動物の中でも多くの人に親しみやすいため、対外的に伝えやすいと考えた哺乳類について、調査を行うことにした。本研究では中央大学多摩キャンパスに生息する哺乳類について研究を進めていくうえで必要となる、種類と出現回数などを調べ、今後の研究に続く基礎情報を集めることにした。

2. 調査地

中央大学多摩キャンパスは、経済学部、商学部、文学部、総合政策学部、国際経営学部合わせて15600人以上の生徒、それに加え教職員が、広さ約518,401m²に集う人口密集地でありながら豊かな緑も併せ持つ土地である。そのため、私たちがインタビューをさせていただいた守衛の方が、「夜歩いていると、野生動物の目が暗闇の中で光るのを目撃することがある」とおっしゃるなど、中央大学多摩キャンパスに哺乳類が存在するのは確実であった。実際、過去に教職員の方が書かれたエッセイには、中央大学多摩キャンパスに特定の哺乳類が生息すると記されていた。しかし、現在ではそうした調査は打ち切られているこ

とが分かった。そこで中央大学白門スタートアップ奨学金を元に赤外線カメラを購入し、2022年10月19日から調査を開始、2023年10月9日まで行い、その間に撮影された動画を集計した。(ただし子育てを行っているアナグマの親子の巣に集中的にカメラを置いた2023年6月19日から7月3日及び、その後もアナグマ親子に密着したが、雨水により動画を保存するSDカードが故障し、動画が撮影されても読み込むことができなくなっていた2023年7月3日から8月21日の間を除いて、撮影回数を集計した)



画像1 緑豊かな多摩キャンパスの植生

3. 調査方法

市販の赤外線調査用カメラ (Ltl-Acorn

5210A940NM)を使用した。これらの機器は撮影時の日時分、月日年等のデータを保存できる。また撮影時間の設定も可能である。担当事務局にカメラ設置の許可を頂き、学生が映りこむことのないような場所にカメラを木に巻き付け、人が通っても誤って映ることの無いように、「調査中」という貼り紙を付けて調査を行った。



画像 2 実際に設置したカメラの写真

4. カメラの設置場所

学生が映りこまない場所という制約が働き、カメラを設置したのは主に大学の中央北側に集中している。2023年10月に入ってからお稲荷さんが位置する山にカメラを設置した。

5. 調査結果

およそ10か月の間に3台のカメラを合わせて159枚の動画を撮影した。

撮影された動物の種類としてはホンダタヌキ 74回ニホンノウサギ 20回ハクビシン 13回ニホンアナグマ 12回ノラネコ 10回ネズミの一種 2回ホンドキツネ 1回アライグマ 1回、足音だけなど不明ではあるが動物の存在が確かなものが28回確認された。最も多様な種が見られた、「多様性の高いエリア」が、中央大学北門の左の斜面を

登った場所であった、ホンドキツネ、ニホンアナグマ、ニホンノウサギ、ホンダタヌキ、ハクビシンが撮影された。そのエリアにカメラを設置していた期間は、2022年10月19日から、2023年1月17日までの3か月弱であったが、ニホンノウサギが特に頻繁に撮影された。人が刈ることで地面に新芽を出した笹がニホンノウサギの餌になっていることが、動画や食痕から観察された。

6. 残された課題

赤外線カメラによる調査では、個体の識別や特定の個体の行動を長時間にわたって把握することが極めて難しいことが課題になった。今年度は予備調査として、映るか分からない場所にもカメラを挑戦的に設置した。カメラの設置場所を少しずつ移動させ、動物の移動経路を調べることを試みたためだが、振り返ってみれば定点観測に強みがある赤外線カメラには向いた手法ではなかったと言える。予備調査が終わり、今後はカメラを定点に定め、しっかり出現頻度、時間帯を分析することが求められる。また、三脚を用いずに、カメラを木に括り付ける手法は、同じ木に設置しても毎度、わずかに画角が変化してしまい、正確性を欠いた。

7. ロールモデルから見る、この活動の意義

玉川大学では生物自然研究部の学生が40年以上に渡って、玉川学園内の緑地に生息する野生動物を調べ、その成果を初等部、中等部に向けて発表することで、調査する学生自身だけでなく、発表を聞く学生にとっても為になる環境教育になっているという。¹ それは私たちの研究でも可能であり目標とするべきだと考えている。加えて、こうした森林をフィールドとする研究は、豊かな自然を有する郊外型キャンパスでなければ実現しない、郊外が持つ特権であり、八王子の魅力を発掘するという意義があるのではないだろうか。

1 「玉川学園キャンパスにおける環境教育」、参照 2023年10月24日、
https://www.tamagawa.jp/university/faculty/bulletin/pdf/bulletin_01-pdf-11.pdf.